

第三者による授業雰囲気の評定と教師の非言語行動との関連†

大久保智生*1・岸俊行*2・澤邊潤*3・野嶋栄一郎*4

香川大学教育学部*1・福井大学教育地域科学部*2

新潟大学教育・学生支援機構*3・早稲田大学人間科学学術院*4

本研究の目的は、第三者が評定した授業の雰囲気と教師の非言語行動との関連を検討することであった。大学生200名が小学2年生の2学級の授業のビデオを視聴して授業の雰囲気を評定し、評定授業の教師の非言語行動との関連を検討した。その結果、一斉授業場面における第三者評定による授業雰囲気と教師の立ち位置および視線方向に関連があることが示された。以上の結果から、教師は立ち位置や視線の方向を変えることで授業の雰囲気を変えている可能性があることが示唆された。

キーワード：授業雰囲気、非言語行動、第三者評定、一斉授業

1. はじめに

近年、学級崩壊、授業妨害などの授業が円滑に行われないという現象が問題視されてきている。最近では、こうした問題に対して、問題を起こす児童・生徒だけではなく、問題を起こさない児童・生徒や教師を含む周囲の雰囲気の視点からの研究が見直されてきており（加藤・大久保 2006, 大久保・加藤 2006）、その中でも一斉授業場面の雰囲気に焦点を当てた研究の必要性が提案されている（岸ら 2010, 大久保ら 2010）。

授業の雰囲気に関する研究は、これまで主に授業中の教師と児童の発話研究の中で行われてきた。その中でも、FLANDERS (1970) の授業中のカテゴリー分析は、授業の雰囲気を検討した最も有名な研究といえる。発話研究以外の授業雰囲気の研究では、わが国の吉崎・

水越 (1979) の授業における学級集団雰囲気の研究が挙げられる。吉崎・水越 (1979) は授業の構成員である児童に授業の雰囲気を評定させ、授業の雰囲気と教師の教授行動との関連を明らかにした。また、最近では、岸・野嶋 (2006a) が第三者に授業の雰囲気を評定させ、授業の雰囲気と教師の教授行動との関連を明らかにしている。

授業の雰囲気と教師の教授行動との関連が先行研究において示されているが、授業の雰囲気と教師の教授行動を検討する際には、非言語行動も視野に入れる必要があるだろう。ROSENTHAL (1974) が非言語的コミュニケーションは雰囲気の次元で効果を持つことを指摘しているように、教師の非言語行動は授業の雰囲気と関連すると考えられる。したがって、教師の非言語行動に焦点を当て、授業雰囲気との関連を検討することは教師がどのように授業の雰囲気を形成していくかを考える上で重要となるだろう。何よりも多面的に授業を検討する際、こうした研究を行うことは意義があるといえるだろう。

以上の議論より、本研究では授業の雰囲気を測定し、当該授業における教師の非言語行動と授業雰囲気との関連を明らかにすることを目的とする。授業雰囲気の評定に際しては、評定者が直に当該授業を観察し評定することが望ましいが、同一授業を何人もの人が観察・評定を行うのは教室のスペースの関係等を考慮する必要があり、物理的に困難である。そこで、本研究では授業評定に関して、実際の授業を録画したビデオを用いて、そのビデオ映像を視聴することによって授

2013年3月29日受理

† Tomoo OKUBO*1, Toshiyuki KISHI*2, Jun SAWABE*3 and Eiichiro NOJIMA*4 : Relationship Between Atmosphere and Nonverbal Behavior in Two Different Classes at Elementary School

*1 Faculty of Education, Kagawa University 1-1 Saiwaicho, Takamatsu-shi, Kagawa, 760-8522 Japan

*2 Faculty of Education and Regional Studies, University of Fukui 3-9-1 Bunkyo, Fukui-shi, Fukui, 910-8507 Japan

*3 Institute of Education and Student Affairs, Niigata University 8050 Ikarashi 2-no-cho, Nishi-ku, Niigata, 950-2181 Japan

*4 Faculty of Human Sciences, Waseda University 2-579-15 Mikajima, Tokorozawa-shi, Saitama, 359-1192 Japan

業の雰囲気測定する第三者評定の手法を用いることとする。

具体的には、第三者によって評定された授業雰囲気と教師の非言語行動として授業中における教師の立ち位置と視線の方向との関連を検討する。本研究では、教師の立ち位置と視線の方向に注目するが、ジェスチャーなどの他の非言語行動と異なり、評定がしやすいことがこの2つに焦点を当てる理由である。その際、岸・野嶋(2006b)の研究において、教師の教授方略が典型的に異なると判断された同学年の2学級の授業のビデオを見せ、授業の雰囲気の評定を行い、非言語行動との関連を学級ごとに検討することとする。

2. 方法

2.1. 評定者

大学生および大学院生200名(男子103名, 女子97名)が評定を行った。

2.2. 質問紙

岸ら(2010)の研究で作成された「授業雰囲気尺度」を使用した。この尺度は、「統制的雰囲気」7項目、「自由・積極的雰囲気」6項目、「喧騒的雰囲気」5項目の3因子計18項目から構成されている。なお、回答形式は、「あてはまらない」から「あてはまる」までの5件法である。

2.3. 評定授業

埼玉県内にある公立小学校2年生の2学級(便宜上A組, B組とする)を評定対象とした。各学級とも男子14名, 女子16名の計30名であった。授業者は、いずれも学級担任であり、A組は50歳代, B組は40歳代の女性教師であった。なお、2年生の2学級の授業を対象とした理由としては、岸・野嶋(2006b)の研究において、A組の教師は「相互交渉型の規律型」、B組の教師は「冗長型」に分類され、明らかに教授方略が異なることが示されているからである。また、岸・野嶋(2006a)の研究において、この2学級において授業雰囲気と教授行動の関連を検討していることも対象とした理由である。

評定対象となる授業は国語の授業で、各学級5回分(1回45分授業)であり、同一単元の内容を取り扱ったものであった。その時間の内容とかわりなく、評定してもらうことを意図し、同一単元の授業を対象とした。映像記録は、教室全体が写るように、教室の後方と前方2箇所の計3箇所にビデオカメラを設置して授業を録画した。映像記録は、教室の後ろから教師の動きを中心に、教室全体を俯瞰的に撮影した。

本研究の目的は、授業雰囲気と当該授業における教師の非言語行動との関連の検討であるため、授業雰囲気の評定には、その授業の特徴をできるだけ多くの授業をもとに総合的に判断することが不可欠である。当該学級の1回みの授業をもとに判断した場合、教師の気分や授業内に偶発的に生じる様々な出来事によって、評定内容に違いがでてくることも想定される。そして、授業は教師と児童・生徒のコミュニケーションの連続体であることから1回みの授業ではなく、複数回の授業をもとに評定する必要があるといえる。しかし、各学級5回分、計10回分全ての授業を評定者が視聴することは困難であるため、一人の評定者が各学級2回分、計4回分の授業を視聴して、授業雰囲気の評定を行った。

評定は以下の通り行った。A組の1回目とB組の1回目の授業を1つのユニットとし、便宜上Iとした。同様に、II, III, IV, Vのユニットを作った。各評定者が、2つのユニットを視聴し、評定を行った。I→IIを見る評定者、I→IIIを見る評定者というように組み合わせを作った。授業の雰囲気を評定するという本研究の性格上、授業の流れを重視し、II→Iを見る評定者やIII→Iを見る評定者という組み合わせは作らなかった。したがって、ユニットの組み合わせは10通りとなる。

さらに、カウンターバランスを考慮し、A組→B組の順で見る評定者とB組→A組の順で見る評定者をほぼ同数にした。したがって、200名の評定者を約10名ずつの20グループに分け、視聴を行ったこととなる。

2.4. 分析方法

非言語行動については、各授業45分のビデオ録画を、授業開始から授業終了後まで10秒ごとにキャプチャーして分析を行った。教師の立ち位置に関しては、「左前」、「真中前」、「右前」「左後」「右後」の5つの画像に分類した。視線方向については、「児童」「教科書」「黒板」「その他」の4つに画像を分類した。授業雰囲気と教師の非言語行動の相関係数を算出する都合上、授業雰囲気の測定に合わせる形でそれぞれのユニットごとに立ち位置と視線方向の量を算出した。

3. 結果および考察

3.1. 授業の雰囲気と教師の立ち位置の関連

まず、授業の中で教師がどの立ち位置にいるのかを検討するため、割合を算出した(表1, 表2)。その結果、A組においては、「左前」が57.6%、「真中前」が8.9%、「右前」が27.7%、「左後」が0.5%、「右後」が

表1 A組における授業雰囲気と教師の立ち位置の関連

	左前 (57.6%)	真中前 (8.9%)	右前 (27.7%)	左後 (0.5%)	右後 (0.7%)
統制的雰囲気	-.600*	-.027	.590*	.545	.261
自由・積極的雰囲気	.534	.105	-.582*	-.499	-.173
喧騒的雰囲気	.453	.459	-.780**	-.301	-.345

カッコ内は5回の授業における平均比率 *p<.05, **p<.01

表2 B組における授業雰囲気と教師の立ち位置の関連

	左前 (11.2%)	真中前 (6.0%)	右前 (56.5%)	左後 (8.1%)	右後 (12.4%)
統制的雰囲気	.334	-.814**	.462	.621*	-.122
自由・積極的雰囲気	-.266	.712*	-.421	-.541	.124
喧騒的雰囲気	-.256	.331	-.287	-.111	.398

カッコ内は5回の授業における平均比率 *p<.05, **p<.01

0.7%であった。したがって、A組では教師が教室のほぼ前方部分のみを移動して授業を行っていることが明らかとなった。B組においては、「左前」が11.2%、「真中前」が6.0%、「右前」が56.5%、「左後」が8.1%、「右後」が12.4%であった。したがって、B組では後方にも教師が移動しながら授業を行っていることが明らかとなった。

次に、授業の雰囲気と教師の立ち位置の関連を検討するため、相関係数を算出した。その結果、A組においては、教室の「左前」と「統制的雰囲気」($r=-.600$, $p<.01$), 「右前」と「統制的雰囲気」($r=.590$, $p<.05$), 「自由・積極的雰囲気」($r=-.582$, $p<.05$), 「喧騒的雰囲気」($r=-.780$, $p<.01$)に有意な関連が認められた。したがって、A組では、教師が教室の「左前」にいるときは「統制的雰囲気」が弱まることと、「右前」にいるときは「自由・積極的雰囲気」と「喧騒的雰囲気」が弱まり、「統制的雰囲気」が強まることと明らかとなった。B組においては、教室の「真中前」と「統制的雰囲気」($r=-.814$, $p<.01$), 「自由・積極的雰囲気」($r=.712$, $p<.01$), 「左後」と「統制的雰囲気」($r=.621$, $p<.05$)に有意な関連が認められた。したがって、B組では、教師が教室の「真中前」にいるときは、「統制的雰囲気」が弱まり、「自由・積極的雰囲気」が強まることと、「左後」にいるときは「統制的雰囲気」が強まることと明らかとなった。

以上の結果から、「相互交渉型の規律型」型のA組の教師は前方、一方、「冗長型」のB組の教師は移動しながらというように、教師によって移動量や位置は異なるが雰囲気を切り替えるポイントを有していることが示唆された。つまり、無意識に立ち位置を変えることで授業の雰囲気を切り替えている可能性がある。

表3 A組における授業雰囲気と教師の視線方向の関連

	児童 (72.8%)	教科書 (7.1%)	黒板 (12.2%)	その他 (3.3%)
統制的雰囲気	-.300	.725**	-.254	-.467
自由・積極的雰囲気	.364	-.808**	.254	.440
喧騒的雰囲気	.490	-.915**	.104	.355

カッコ内は5回の授業における平均比率 **p<.01

表4 B組における授業雰囲気と教師の視線方向の関連

	児童 (65.3%)	教科書 (17.3%)	黒板 (10.4%)	その他 (1.3%)
統制的雰囲気	.355	.583*	.237	-.396
自由・積極的雰囲気	-.337	-.471	-.213	.293
喧騒的雰囲気	-.223	.105	-.429	-.057

カッコ内は5回の授業における平均比率 *p<.05

3.2. 授業の雰囲気と教師の視線方向の関連

まず、授業の中で教師がどこに視線を向けているのかを検討するため、割合を算出した(表3, 表4)。その結果、A組においては、「児童」が72.8%、「教科書」が7.1%、「黒板」が12.2%、「その他」が3.3%であった。したがって、A組では「児童」が教師の視線方向として最も多かった。B組においては、「児童」が65.3%、「教科書」が17.3%、「黒板」が10.4%、「その他」が1.3%であった。したがって、B組でも「児童」が教師の視線方向として最も多かった。

次に、授業の雰囲気と教師の視線方向の関連を検討するため、相関係数を算出した。その結果、A組においては、「教科書」と「統制的雰囲気」($r=.725$, $p<.01$), 「自由・積極的雰囲気」($r=-.808$, $p<.01$), 「喧騒的雰囲気」($r=-.915$, $p<.01$)に有意な関連が認められた。したがって、A組では、教師の視線が「教科書」にあるときは、「統制的雰囲気」が強まり、「自由・積極的雰囲気」と「喧騒的雰囲気」が弱まることと明らかとなった。B組においては、「教科書」と「統制的雰囲気」($r=.583$, $p<.05$)に有意な関連が認められた。したがって、B組では、教師の視線が「教科書」にあるときは、「統制的雰囲気」が強まることと明らかとなった。

以上の結果から、「相互交渉型の規律型」のA組の教師と「冗長型」のB組の教師のどちらにおいても教師の視線は児童に向けられることが最も多いことが明らかとなった。この結果は、有馬(2008)の研究結果とも一致していた。また、どちらの学級においても教師の視線が教科書にあるときは統制的な雰囲気を強めることが明らかとなった。つまり、教師が教科書を見ることは授業の雰囲気を統制的に切り替えることと関連しており、どちらの学級においても暗黙のルールにな

っている可能性がある。

4. 結論と今後の課題

本研究の目的は、一斉授業場面において授業の雰囲気と教師の非言語行動との関連を検討することであった。その結果、一斉授業場面における授業雰囲気と教師の立ち位置および視線方向に関連があることが示された。以上の結果から、第三者評定による授業雰囲気と教師の非言語行動は関連していることが示された。

第三者評定による授業雰囲気が教師の非言語行動と関連していたことは、ROSENTHAL (1974) の指摘とも一致しており、納得のいく結果といえる。そして、立ち位置のように教師によって雰囲気を切り替えるポイントが異なる非言語行動と視線方向のように共通した雰囲気を切り替えるポイントがある非言語行動があることは非常に興味深い。ただし、教師の視線については、伊藤・関根 (2011) の研究からいくつかのスタイルがあることが明らかになっていることから、詳細に検討する必要があるだろう。そして、今後は、ジェスチャーなど教師の様々な非言語行動に焦点を当て、教師に共通した雰囲気を切り替えるための非言語行動なのか、教師個人特有の切り替えのポイントとしての非言語行動なのかを探っていく必要があるだろう。

今後の課題として、多様な評価者に授業の雰囲気を評定させることも視野に入れていく必要があるだろう。例えば、教員養成課程の学生は、一般の大学生や大学院生よりも教育実践に関わる機会が多いことから見る視点が変わってくる(大久保ら 2010)。このように、様々な視点から授業の雰囲気を評定することが必要になるだろう。また、本研究で評定させた授業は、岸・野嶋 (2006b) の研究で典型的に異なると判断された2学級の授業であり、過度の一般化は避ける必要がある。加えて、授業の雰囲気と教師の非言語行動の相関係数を算出する都合上、それぞれのユニットごとに立ち位置と視線方向の量を算出したが、この方法については議論の余地があるといえる。

付 記

本論文は日本教育心理学会第47回総会において発表した内容をまとめたものである。

謝 辞

本研究実施に当たり、ご協力いただいた皆様に心より感謝いたします。また、2006年3月に急逝された早

稲田大学大学院の村瀬勝信氏には、研究の立ち上げの段階から共同研究者として、様々な有益な助言を賜りました。ここに感謝の意を捧げるとともに心よりのご冥福をお祈りいたします。

参 考 文 献

- 有馬道久 (2008) 児童への注視行動を手掛かりにした授業中の教師の省察に関する分析. 日本教育心理学会第50回総会発表論文集 : 683
- FLANDERS, N.A. (1970) *Analyzing teaching behavior*. Addison-Wesley, Reading, MA
- 伊藤崇, 関根和生 (2011) 小学校の一斉授業における教師と児童の視線配布行動. 社会言語学, 14 : 141-153
- 加藤弘通, 大久保智生 (2006) 問題行動をする生徒および学校生活に対する生徒の評価と学級の荒れとの関係 : 困難学級と通常学級の比較から. 教育心理学研究, 54 : 34-44
- 岸俊行, 野嶋栄一郎 (2006a) 小学校国語科の一斉授業における雰囲気の検討. 人間科学研究, 19 : 75-84
- 岸俊行, 野嶋栄一郎 (2006b) 小学校国語科授業における教師発話・児童発話に基づく授業実践の構造分析. 教育心理学研究, 54 : 322-333
- 岸俊行, 澤邊潤, 大久保智生, 野嶋栄一郎 (2010) 学生・教師を対象とした異なる学級における授業雰囲気の評価 : 授業雰囲気尺度の作成と授業雰囲気の第三者評定の試み. 日本教育工学会論文誌, 34 : 45-54
- 大久保智生, 加藤弘通 (2006) 問題行動を起こす生徒の学級での位置づけと学級の荒れおよび生徒文化との関連. パーソナリティ研究, 14 : 205-213
- 大久保智生, 澤邊潤, 岸俊行, 野嶋栄一郎 (2010) 教職志望学生を対象とした異なる学級における授業雰囲気の検討 : 教職志望学生はどのように授業の雰囲気を認知しているのか. 香川大学教育実践総合研究, 21 : 117-124
- ROSENTHAL, R. (1974) *On the social psychology of self-fulfilling prophecy: Further evidence for Pygmalion effects and their mediating mechanisms*. MSS Modular, NY
- 吉崎静夫, 水越敏行 (1979) 児童による授業評価 : 教授行動・学習行動・学級集団雰囲気の視点より. 日本教育工学会論文誌, 4 : 41-51

(Received March 29, 2013)